

【第3分科会】①

東京都高等学校美術工芸教育研究会 鑑賞プロジェクトチーム
代表発表者 若松由希子先生（東京・東京都立桐ヶ丘高等学校）
森永伊聡先生（東京・豊島区立西巣鴨中学校）

－多様・多層な生徒の、造形的分析力・アウトプット力を押し上げる教育－
Ⅰ「鑑賞教育プロジェクト」について
Ⅱ美術の授業におけるアートカードゲームの有効性

以下、現時点での返答をさせていただきます。まだ研究半ばにあり、本研究会、鑑賞プロジェクトのメンバーとも、これからも追及していくべき貴重な課題を御質問いただいていると思い、感謝いたしております。今後とも、全国の皆様とともに研究を進めさせていただきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

（文責 東京都立桐ヶ丘高等学校 美術科教諭 若松由希子
東京都豊島区立西巣鴨中学校 美術科教諭 森永伊聡）

Q1 Facebook ページをご案内してほしい

A 東京都高等学校美術工芸教育研究会では、サイト<http://tokyo-bikouken.net/>を運営しています。

また、サイトから<https://www.facebook.com/tokyobikouken/>へ入ることができます。

Q2 「アートカード」の入手方法は？価格は？種類は？自作できますか？借用できますか？

A 都美研では、現在、国立美術館アートカードを16セット、美術出版のSCOPE アートポストカードグループセット（教師用1+生徒用6セット）を3セット、保持し、各高の要望により貸し出しています。

千葉大会で使用したアートカードセットは、東京国立近代美術館（本館・工芸館）、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の所蔵作品から13点ずつ選ばれているものです。値段は¥2500で購入しやすい値段ですが、現在品切れの様です。

http://www.nmao.go.jp/study/art_card.html

美術出版のSCOPE アートポストカード集は、授業で40人規模のクラスで利用できるグループセットですと¥50000しますので、計画的な予算立てが必要だと思います。

http://bijutsu.biz/bss_bsc/scope/postcard.html

その他の出版社も様々なアートカードを販売しています。

そしてやはり、各先生方で自作しておられる場合も多いです。今までの例としまして、

- ・旧教科書を使って生徒と一緒に自作した。
- ・修学旅行の事前学習として、仏像の制作方法に分けて仏像カードを制作した。
- ・画家の自画像を集め、分析した。
- ・教員が集めた障害者の方々の作品も含めたポストカード300枚を使用して行った。
- ・インターネットで画像を葉書大に印刷し、ラミネートして使用している。等です。その他にも自作しておられる先生は多くおられると思います。

Q3 カードゲームの具体的な応用例について知りたいです。

A 千葉大会後も様々な取り組みが続いています。アートカードセットには、どれもいろいろな展開方法が書かれたガイドブックが付いています。その中で「選んだカードを音で表してみよう」というものがありました。生徒の発案により、オノマトペを表現した言葉集めが自主的に行われ、言葉に対する感性が深まったこともあります。アートカードは、他の人の感性や作品の良さや違いに気づくきっかけとしてあり、そこから生徒が主体的に踏み込んでいくことが大切だと考えています。生徒のつぶやきに、ヒントが多くあります。

普通科の高校では、部活動の一環として地域の小学生や高齢者の方々で行う等があります。総合学科の高校では、授業内に地域との交流等が行われている学校も多くあり、実際に「地域交流」で、普段対話する機会が無い方々とアートカードを通して良い人間関係をつくる機会を得ることができました。30分程度の取り組みでも、ワークショップ会場から出る時に、高校生と地域の方々が肩を寄せて談笑する、親密な様子をみせてくれました。

Q4 「アートカード」のルールのバリエーションは？

A 上記を御参照ください。

Q5 対話型鑑賞において、知識（美術史・作品の背景・作者の意図 等）や、自分の考えを深める部分はどう扱いますか？

A 千葉大会に先立ち、7月25日にアートカードを使った授業実践研究を行いました。そこでの、またそれまでの実践を、4つに分類する試案を、千葉大会で発表しています。

- ①ファシリテータ養成、外部との連携（教員が主導）
- ②アートカードで伸ばす力対話型鑑賞、言語活動を取り入れた学び
- ③高校生のアートコミュニケーターの育成
- ④確かな学力、造形リテラシーを育成、造形リテラシーを育てていく
造形言語、色、形、線、空間などを元に表現する力、作者のバックボーンや歴史的、あるいは技法的な知識

御質問は④にあたるかと考えておりますが、どの実践もアートカードを活用することで、受け身的な鑑賞から抜け出すことが大切だと考えています。与えられた情報を最初から正しい知識として捉えることから抜け出し、隣りの友達との意見の違いに気づく、作者の生き方を探してみたいと思う、疑問を持つ、等を解決していく過程で身に付けていく問題解決能力が、これから生きる生徒の力につながっていくと考えています。

また「対話型鑑賞」においては、固定的な知識を取り扱わない方がうまくいくともいわれています。固定的な知識を与える場合は、教員がどのような意図をもって行うかが大切で、与えるとしても対話型鑑賞事後に行ったり、調べ学習につなげる場合が多いと思います。事前に与えるならどの程度の情報を与えれば生徒の学びがより深まるか考えるべきだと考えています。

千葉大会の分科会で、千葉大学の後藤雅宜先生から、美術・工芸教育には、すでに協同的な学習が機能していること、そして実践のプロトタイプ（実践例）を継続して積み重ね、検討していく大切さを、御助言いただきました。プロトタイプにつきましては、すでに御協力をいただいている ARDA の方とも進めていく方向を確認しています。また、全国にも発信していきたい所存です。

Q6 観点別評価はどのようにしていますか？

A 現行の学習指導要領での観点別評価は大切な土台になっていると思います。次期学習指導要領では、さらに主体性が大切になってきています。OECED が編集している「学習の本質」等の文献にもみられる様に、グローバル化の世界で未だ評価の在り方は定まっていない様です。

まず、現在、中学校で指導している森永から、アートカードゲームや対話型鑑賞を、評価材料として数値的に評価できるかどうか、という実務的な面からお答えいたします。

森永の場合、対話型鑑賞、アートカードゲームはあくまで鑑賞の導入&エクササイズという扱いにしており、評価材料を集める場合には「対話型鑑賞やアートカードゲームで鑑賞の能力が高まったという前提」で、活動後に作品の感想をワークシートに記入するなどして、従来通り評価を行っています。

評価基準は 6 段階（ABC をそれぞれ 2 つに分ける）で、「求められている質問に対して自分の考えを書いている」を B として、色・形・材料（中学校の『共通事項』の項目）などについて言及しているか、考えの根拠を具体的に述べているかで段階的に評価をしています。

ただし、この方法では自分の考えを言語化できない生徒（特別な支援が必要な生徒、外国から移住してきた生徒）の成長ははかれないので、更なる改善が必要だと考えています。

しかし現在の中学校の状況では保護者や生徒の受験に対する意識の高まりから、明確に評価規準を説明できることが求められていることを考えると、この方法で大筋では学習指導要領に合致しており、説明責任を果たせる評価規準だとは思っています。

対話型鑑賞、アートカードゲームの活動自体を評価することは、評価そのものの是非も含めて非常に難しい問題です。生徒の「発言」を拾って評価するには、映像記録して録画を検証して評価するなどが考えられます（実践はまだしていません）。

そして以下は、若松が特別支援学校高等部の経験が長いことから来ている考えとして捉えていただきたいのですが、教科の観点は本当にとっても大切ですが、教科の側からのみでは、生徒の課題解決に結びつく力を評価すること

は難しくなっていると思っています。生徒が主体的に自身の課題を解決していくには、教科の観点別評価を横軸とするならば、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」等、社会に結びつく領域にあたる観点別評価を、縦軸として生徒が自覚できるように、授業でも評価していくことが必要ではないかと若松は考えています。また、高校生のキャリア教育として、社会につながる「家庭」「地域」「生涯学習」「医療」「福祉」も移行支援の奥行きとして、見定める必要があると考えています。まだ、定まっていることではありませんので、投げかけとお考えください。上記の縦軸となる6つの観点は、特別支援教育の学習指導要領で「自立活動」として位置づけられています。

Q 7 ファシリテーターの育成法は？（3 2）美術館で高校生がファシリテーターを務める例はありますか？

A 実は本格的なファシリテーターを務めるには、大人でも本格的な研修と継続的な学び合いが必要です。本研究会でも、高校生をすぐにファシリテーターと呼ぶことには無理があると考えています。ですが、その方向を目指そうとする高校生はおりますし、上記に述べた地域での交流での活用や、美術館でのサポート活動への参加はとても大切な歩みです。そこではコミュニケーターと仮に呼ぶことが多いです。

Q 8 同じ課題で中学と高校ではどんなことが違いますか？

A 生徒の成長段階を捉え、生き生きとした活動になることが、中学でも高校でも必要と考えています。高校では、さらにキャリア教育の観点が強くなりますので、より社会との結びつきを教員側も意識することが必要だと思えます。

Q 9 グループの作り方はどのようなことを踏まえて行っていますか？（8 3）

A いろいろな変化を持たせている先生がほとんどだと思います。グループの作り方は、その時の学習の目標によるのではないのでしょうか。最初は「仲の良い友達でないと・・・」と渋っていた生徒も、このような学びを続けていると「何故そうするのか」「目標は何か」を知ることが喜びが見られ、こちら嬉しくなります。きっと先生方も、普段の授業で感じられることが多いのではないのでしょうか。